



子どもの本から

秋風が教えてくれた木の秘密

美谷島いく子

『グレイ・ラビットのおはなし』や『時の旅人』などの素晴らしい作品で知られるアリソン・アトリー。彼女の五十年前前に出版された本の中から、珠玉の六編を選び、邦訳した短編集『西風のくれた鍵』に、最近出会うことができた。この表題作には、同時代に生きた宮沢賢治の作品と共通する美しいイメージが、散りばめられているのに驚いた。

表題作「西風のくれた鍵」は、森の木々を渡る西風か

らの謎掛け声を、耳を澄まして聞いた、幼いジョン・バ
ンチングの物語である。

アリソンは、この作品で、落葉し、孤高に聳えている
物言わぬ木が、年輪の一番内奥に隠し持っている「木の
秘密」を、優れて美しく解き明かしてくれた。

木の秘密を解く際に用いる「西風のくれた鍵」とは、
晩秋に西風が木々をゆさぶり、謎掛け歌を唱えながら、
地面に投げつけていった、木の枝に付いている、カエデ

の実、トネリコの実、カシの実（どんぐり）のことである。ジョンはその木の実を拾って持ち帰り、夜、炉端で、樵である父ちゃんに木の中に何がまつまっているか質問する。「芯まで、ぜんぶ、木だよ……」「……強くて、かたい。だから、トネリコで、レーキやまたぐわをつくるんだ。トネリコの幹は灰いろで、すべすべしているから、すぐわかる。それに、まきにすりゃ、このうえなく、よく燃える！ 暗がりでも、トネリコは、葉っぱが、水が流れるようにゆれるから、おれにはわかるよ」。外側から見える木の生命の有り様と、木からの恵みを語る父ちゃんの言葉を聞き、ジョンは謎をめぐって思いを廻す。

『水仙月の四日』の赤毛布の子どもが、ヤドリ木の赤い実のついた枝を大切に持ち歩いたことにより、雪童子の心が動かされ、宇宙の仕掛けが一寸狂ったように、小さいジョンが、木の実の枝を拾い、大切に思いを廻すことにより、木の実の鍵で、木の幹の一部が、カチリとあい、木の秘密を知ることができた。無力に見える小さい

子どもが、決然と西風からの謎に挑み、無用に思える営みに暮れたことにより、神異が起ったのだ。

幹に各々の実の形にあった鍵穴を探し、木の実の鍵を差し込む所は、鍵社会である西欧の作品らしい。しかし、鍵があいても、すぐに木の秘密がわかる訳ではない点が、アリソンたる所以である。ただ眺めているだけでは、その小さな穴（戸棚）は、空っぽで、木の秘密は、何も明らかにならない。光、音、肌触り、暖かさを、「こすったり」「触ったり」して感じ取ろうとする時、木の秘密は、初めて明かされるのである。これは、四マイル離れた隣村の小学校に通う為、アリソンが早朝や夕暮れにも通らなければならなかった、イングランドの「暗い森」での原体験によると思われる。

「木の秘密」とは、幸福そうなカエデは、夏の日のひとかけら、妖精の木トネリコは、気持ちのよいあふれる程の音楽、樹齢五百年のカシは、五百年昔の若かった頃の日々を、隠し持っていること。『時の旅人』で、少女ペネロピーにとっての避けられない時の到来を描いたアリ

ソンは、この物語では、少年ジョンが、木の内奥に見つけた、木の生命の源となる、流れ去ることのない時間を描いた。木の秘密は、西欧の作品には珍しく、一吹き西風で、扉が閉じられ束の間の内に消えてしまう。その故に、木の秘密は、彼の心に、永遠の透き通った輝きを放ち続けるだろう。

私は、この物語を初めて読んだ時、幼い日の伊勢湾台風の翌日のことを思い出し、私のしたことは、正にこれだったのだと思った。昨夜の大嵐は嘘の様な高い青空の下、大人は、近所の被害に心を痛めているのに、幼い私は、なんだか楽しくて、裏の林の中で、台風のくれた実（鍵）で一日中、遊び惚けていた。台風は、普段は天に近い高い梢にあって、小さい私が見上げるだけで手に取ることができない、朱色の辛夷（ヒメミズナギ）、真赤な花木、いがいがの朴や栗の実を、私に、置き土産として、ばらばらと残してくれていたから。

イーハトヴの森を吹き渡る、透き通った風を、しばしば描いた賢治は、秋風を「ざあざあ、こうっ、どう」と

オノマトペで表現した。イングランドの森を吹き渡る、晩秋の西風を、アリソンは、「チャリンチャリン、ひゅうひゅう、カタカタ」とオノマトペと共に、謎掛け歌を唱え、人間が動作をするように擬人化して表現している。

「なぜなぞかけた　といてみる

おれのポケットにゃ　鍵（カギ）がある……」

アリソン世界の扉は、突然、西風から仕掛けられたこの「謎掛け歌」によって開かれる。

英語のkeyには、「鍵（カギ）」と「カエデの実のような羽のついた実」の意味があることから、*“key”*と唱えることで、二つの同音異義語をイメーシする、言葉遊びの面白さから、ジョンの謎解きは始まる。英国では、マザーグースの中で、「謎々」は一つの類に分けられている程、大きな部分を占め、今でも母から子へ伝えられ、楽しまれているという。

母から子への謎掛け声は、甘やかで優しいが、西風からジョンへの唱え声は、金切り声や力強い声で叫んだ

西風のくれた鍵

アリソン・アトリー 作
石井桃子・中川李枝子 訳



り、声をはりあげたりと、強く荒々しい。そして、西風の謎掛けは、「髪の毛をねじるように引っばったり」「どっともどってきておそいかかったり」「なぐりつけ、ぼうしをやぶの中へ吹きとばしたり」と、乱暴で攻撃的な動作を伴っている。

西風からの謎掛けの、強き力ある言葉の繰り返しと、いたずらな動作こそが、この物語の魅力であり、物語

◀ 『西風のくれた鍵』 アリソン・アトリー作

石井桃子、中川李枝子訳 岩波書店 一九九六年

を、先へ先へとざわめき立たせ、謎解きの原動力となっている。ジョンも西風の勢いやリズムを了解し、西風と自由に遊び出し、謎の返答も活発になってゆく。

アリソンは、似たストーリーの三種の木の物語を、三つ並べ置いた。各々の秘密を内に秘めた三本の木は、対になったり、響き合ったりしながら、これから成長してゆく、小さなジョンの傍で、個性的な木の生命の有り様を、静謐に謳っている。

(舞々同人)